



ピッポ新聞

2009

9

No.247

子どもの本専門店

ピッポ

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

ある出版社の本の企画提案書は、A4一枚にまとめる決まりだそうです。一枚を越えると、上司が読んでくれません。私はこの連載をAで200枚ほど書いてしまいました。読者のみなさんは、だから続く文章にさぞかし辟易されたことでしょう。私が読者のみなさんに感謝する理由はそこにあります。長くつづけて書くことで、私は思考をそれより何倍も長い時間にわたって持続させることができました。それは最近の出版界ではほとんどお目にかかれないであろう、豊かな時間になりました。そしてわかつた大切なことがあります。

それは、ピアンキが偉大なナチュラリストである、と確信できたことで、私にはなにより価値ある成果でした。私は大いなる喜びをもって、ピアンキを私の心のうちにある偉大なナチュラリストの、数少ない列伝の一人に加えることができました。そして、ナチュラリストの作品の魅力をこの連載で読者のみなさんにお伝えすることになりました。

ピアンキの名作『くちばし』

二つの版の謎をとく

第十五回 (最終回)

ナチュラリスト

とはどんな人か

動物学者 今泉吉晴

ピアンキを偉大なナチュラリストと知ると同時に、私の批評もしつかり岩盤に足が付きまじった。偉大なナチュラリストが書くはずのないことが書かれていけば、それは誤訳を疑っていいはず。そして、誤訳、書き換え、文章の恣意的な追加が、どれほどナチュラリストの作品を損ねたかが、批評の主要な論点になりました。

そしてさらに、とりあげたピアンキの二作品にはしつかりした先訳があつて、誰もが新訳と比べ読みできる環境にあるのに、なぜ編集者も出版社の幹部も新訳の欠陥を見ぬけなかったのか、という問題が浮上したのです。そこにも、ナチュラリストの作品に対する無理解が介在しているのではないかと私は疑いました。

さて、今や、「見解」の検討も、その五つの項のうち、残るは3の「おしゃべりなもり」の掲載作品の選定、および構成」だけです。そこには、なぜ編集者も出版社の幹部も新訳の欠陥を見ぬけなかったのか、その理由が、ほかならぬ出版社の幹部の手によって書かれています。「見解」の3はかなりの文章量があります。しかし、要点は以下の最後の二つの文章に集約されています。「見解」の3の全文は縦書きのコピーを掲載してありますので、そちらでお読みください。

(「おしゃべりなもり」の元の元である)「Lesnaya gazeta」(森の新聞)は・・・対象年齢、出版される地域や時代などといった条件にあわせ、さまざまな編集方針で本として出版されてきました。

原作の性質がこのようなものである以上、編集部は、それを新たに日本の子どもたちに向けて編集し直すことをまちがっているとは考えません。



原本『斧をもたない匠』（『Master Bez Topora』1954年）の扉の絵
 M・チャルシンが描く扉のキツツキの絵。本文に描かれた主人公「ぼく」の夢と妥協のない自然（鳥）を描くチャルシンの重厚な絵の対比がみごとです。私はチャルシンの絵を連載の十一回（ピッポ新聞二〇〇九年五月号）でも引用しました。

「編集し直す」とは、具体的にどのような改編をされているのか、わかりませんが、私のダイジェストになっているという指摘、あるいは誤訳、書き換え、文章の恣意的な追加の指摘に対する回答として書かれています。中友子氏が反論していないことを承知の上

で書いていることから）、それらを含むかなり広い範囲の原作の改変が許される、とみなすこともできません。

しかし、信じてたい言葉です。いったい「見解」の書き手は、『おしゃべりなもり』を「翻訳絵本」として出版していることを忘れてしまったのでしょうか。翻訳に編集し直す作業は含まれないでしょうか。他国で出版された本が、どのような性格のものであるにせよ、それを日本の出版社が自由に編集し直し、何の説明もなく「翻訳絵本」として出版する権利があるとは、私には思えません。こないないかげんな考え方は、新訳の欠陥を見ぬけなくて当然です。

『森の新聞』はピアンキの畢生の本です。そこに記されているのは、広大な旧ソ連邦の各地からとけられる森のニュースです。それら森のニュースは、各地のナチュラリストが自分の目で確かに見たことを全国の読者にとけようと、通信員になってピアンキのもとに送り届けたものです。それをピアンキが熟達のナチュラリストの目で見つかり中身を検討し、価値ある記録をみいだし、一定の方針で編集したのが『森の新聞』です（もちろん、ピアンキ自身の観察の記録も数多く含まれています）。

そこで、『森の新聞』とは、価値ある観察の記録の集約であり、通信員たちの交流の場であり、星座から地中の生きものまでのあらゆる自然の共同研究です。シートンが畢生の著作である『狩猟獣の生活』（Lives of Game Animals）から多くの物語を紡ぎだしたのと同じように、『森の新聞』

からいくつも本が生まれて何の不思議はありません。

でも、ピアンキとは縁もゆかりもない、そしてナチュラリストのセンスとも無縁の子どものたちに向けて編集し直すとしたら、都会の人間の観点によって書きなおされたナンセンスな本にならざるをえません。それが『おしゃべりなもり』の由来というのであるなら、なるほど、とうなずけはします。

「見解」のいう「それを新たに日本の子どもたちに向けて編集し直すことをまちがっているとは考えません」という本づくりの考え方こそ、私が『ネバーランド』誌で指摘した数々の誤訳、書き換え、文章の恣意的な追加をもち、あるいは見過ごした原因ではないか、とさえ思えてきます。

この問題は『森の新聞』の性格をどう見るか、という問題というより、広く科学的な観察のデータをどうあつかうか、の問題です。しかも、ナチュラリストの観察は、個性的な関心の向け方を特徴にしている、客観的・数量的データとは異なる注意深い扱いが必要です。そこで、動物行動学の創始者、コンラート・ローレンツが、出版界に瀾漫するこの種の安易な本づくりの考え方に對して強い警告を発しているのです。ローレンツはこう書いています。

いままでに私が怒りをもってなしたことがあったとすれば、それはこの動物の本

を書いたことだと告白する。

なににたいする怒りか？ こんにちあらゆる出版社から刊行されているおよそ悪質な虚偽にみちた動物の話にたいする怒り、動物のことを語ると称しながら動物についてなにひとつ知らぬ著者たちにたいする怒りだ。・・・ 手もとにある動物愛好会の会報でみた知識で一冊の動物の本が書けるのなら、かつてのヘック、ベンクト・ベルク、パウル・アイバー、アーネスト・シートン、ヴェッシャ・クヴォネジンといった博物誌の著者たちは大馬鹿者というべきだろう。彼らは動物の研究に全生涯をかけてしまったのだから。無責任に書かれた動物の話が読者たち、とくにつよい関心をもつ少年たちの間にどれほど多くの誤りをもたらすかを見逃すわけにはいかない（『ソロモンの指輪』のまえがき。ドイツ語原本は1949年、日本語版は1963年、日高敏隆訳、早川書房）。

『森の新聞』は、ソ連全土のさまざまな地域の自然の実態をニュースとして都市にすむ人たちにとどけて、自然を大きくとらえる交流の環をつくる、という構想をぬきにしたら、ローレンツのいう「動物愛好会の会報」とさして変わりません。

「見解」は、『森の新聞』の構想を尊重するともいわずに、どう編集しようと勝手だ、といわんばかりなのです。また、「見解」の3をよく読むと、『おしゃべりなもり』のもとになった「立ち聞きした会話」

は、『森の新聞』が『森のニュース』に改編される際にあらたにつけ加えられたものであつて、『森の新聞』の他の部分とは直接関係がないのです。

しかし、「見解」の3についてここでこれ以上、論じる必要はないでしょう。ローレンツが安易な著者たちを批判しながら「動物の研究に全生涯をかけてしまった」博物誌の著者たちに敬意を表していることに注目すべきと、私は考えます。すなわち、現代の動物学者の代表ともいえるローレンツが一時代前の偉大なナチュラリストを別格にあつかっています。ご自身をふくむ現代の科学者と偉大なナチュラリストには大きな違いがある、と見ているのです。その違いがわかれば、私たちにもナチュラリストとはどんな人がわかり、ひいてはその作品をどう受け止めたらいいか、がもつとよくわかつてくる、と思えます。

ビアンキは子ども時代に画家・ナチュラリスト、シートンの作品に出会うという幸福な時間をもちました。シートンは青年時代に詩人・ナチュラリスト、ヘンリー・ソロの影響を受けました。シートンの動物物語にはソロの『ウォールデン 森の生活』を実地に試した作品『サンドヒル・スタッグ』があります。ソロはまた、年長の友人であるナチュラリスト、ラルフ・エマソンとその著書、『自然』の影響を受けて、森の生活の実験にとりかかっています。という経緯からみて、エマソンの『自然』(Nature 1836年)こそナチュラリストのものの見方と考え方を知らするための最高の

書物といえます。

『自然』でエマソンはまず、私たちの自然、地球を賛美します。すなわち、自然を大きく全体としてとらえようとします(以下、エマソンの言葉を「」でくくって紹介します(なお、エマソンの『自然』、Zinnには、比較的最近の訳として、斉藤光訳、『自然について』(日本教文社、1996年)と酒本雅之訳、『自然』、エマソン論文集、岩波文庫、1972年があります。共に日本語として意味のとりにくい、読みにくい訳であるため、以下は私の試訳です)。

「いつたいどんなエンジェルが地球をこれほどすばらしく飾り立てたのでしょうか。何と言う使い勝手のよさ。大気層の広がり、下に水の層である大洋が配置され、丸い地球が広がります。そこに12か月の星座が組み込まれ、雨をふらせる雲がただよい、気候帯が地球をとりまき、一年は四季で彩られています。獣、火、水、石、それにトウモロコシが人につかえます。大地はいつでも人の床になり、仕事場になり、遊び場になり、花園と農園になり、そしてベッドになります。」

地球という自然がわたしたちのすみかとして、いかにすぐれて、うつくしく、また楽園であるかを、その構造と運行からとらえました。エマソンのいう自然は、自己以外のすべてで(自分の魂の他のすべて)を

意味し、人工も含むのですが、それは人工もまた自然の法則の利用であつて、真に人間のものではないからです。つまり、ナチュラリストの自然のとらえ方は一人ひとり独特です。

ついで、わたしたち人間は、自然の言葉がわかる、とつたえます。

「人間の慣習と同じように、自然にも形があり、性向があり、それらは人間の言葉とはちがう自然の言葉で私たちに伝えられています。私たちが親しくとりまく美しい自然の驚異に目をむけ、好奇心を開いていこうではありませんか。」

このように人間は自然を読むことができ、という考え方こそナチュラリストに独特のものでしょう。そして、自然とのつきあいはおとなにも、子どもにも、それぞれにふさわしい喜びをもたらす、と請け負います。

「花、動物、山は、賢い人の最良の知的な時間をうつす鏡であると同時に、純粋な子どもたちの簡素な心にかぎりない喜びをもたらします。」

ただし、自然は、内なる自然に忠実な子どもにこそ、明るくせつしてくれたいと思います。そして、自然と交流しようというおとなには、子どもの心をとりのぞきにくい機会になる、といえます。つまり子どもこそ本来のナチュラリストといっています。

「本当のことをいえば、ほとんどの大人は自然を見る事ができません。太陽さえ見ておらず、見ても形だけです。太陽の光は大人の目を明るくするだけでも、子どもなら目を通して心にとどきます。そこで自然を愛する人とは、大人であつても外界に開く感覚と体内の感覚がしっかり交流しあつて統合されており、子どもの精神を大人になつても保持している人といえます。天地との交流は自然を愛する人にとつて、日常のくらしの一部になっています。」

そして、もしできれば、人間社会とはわずかの時間であつてもいいから縁をきつて、一人になり、そのことによつて自然と全面的に向き合う努力をしたらいい、とすすめます。

「あなたが一人になりたいと心から望むなら、人に会わないようにするだけでは十分ではありません。社会から自分を切り離すだけでなく、自分の部屋をでて森に行くことが必要でしょう。誰かといつしよなら一人とはいえないのは当然として、読書をしたり、手紙を書くなら同じことで一人とはいえないでしょう。」

一人になるには、たとえば、森で星を見たらいかげしょう。天空がはなつ光線があなたを今いる世界から切り離してくれます。天空を透明にしたデザインのおかげであなたは、天体という崇高な自然を見る事ができている、とある感動をもつて理解します。天空に広がる神の街のなんという

偉大さでしょう！」

ナチュラリストも科学者のように計測したり、実験したりします。けれど、自然の全体をとらえるには、計測や実験は手間がかかり、細部にかかりすぎます。そこで、五感をもつて（経験を通して）自然をとらえようとしたり、それだけに可能なかぎり自然とふれあう機会をふやそうと努めます。しかし、たとえ一人になつて自然とむきあつたとしても、自然は容易につかみとれるものではありません。エマソンは、自然を知ろうとする試みは、長期にわたるほとんど終わりのない挑戦になるとわたしたちに告げます。

「自然の偉大さに思いをはせるなら私たちは直ちに一つの新しい事実、自然に取り組むのは生涯を要する鍛錬になる、という事実気づきます。」

それはなぜなのか、理由をエマソンはこう書いています。

「自然はけつして間違いません。自然がいいというものはいい。だめというものはだめなのです。」

わたしたちは、自然がだめ、あるいはいい、ということをも、どれほどくりかえしたら、いわれなくてもわかるようになるか、それは気の遠くなるようなたえまのないくりかえしによるよりほかない、と知ってい

3 『おしゃべりなもり』の掲載作品の選定、および構成について

この作品は、『Vestiz lesa』(森からのニュース)の項目の一つ「立ち聞きした会話」に収録された52の作品の中から15話を選び出しています。15話を選んだ基準は、「幼い読者が内容を理解し楽しむことができること」でした。生き物の生態がテーマになっていて、それが生き物同士の会話で楽しく展開

1 「見解」3の前半(『ネバーランド』十巻、二〇〇八年の252ページ)

『おしゃべりなもり』には、原本のごく一部の文章をぬきとって構成した、という説明がありません。私は五二作品から十五作品を選びだすことで原本の何を伝えることができたと考えたのか、絵本の企画の意図を問うています。

されている作品を選びました。原書では森の中で生き物たちが織りなす話を1月から12月まで、数編ずつ掲載されていますが、編集部はすべての話を翻訳し作品化するのではなく、すでに述べたように幼い子どもたちに絵本として楽しんでもらえる作品15編を選びました。しかし、できるだけ森の四季を感じさせる話を選んでおり、季節感を捨象しているという今泉氏の批判は当たらないと考えています。

また、今泉氏は『おしゃべりなもり』の編集の仕方について、「極端なダイジェストである」とされていますが、編集部はそのように考えていません。もともと、『Vestiz lesa』(森からのニュース)は同名のラジオ番組で紹介された作品の中から優れたものをピックアップしてまとめたものでした。このラジオ番組は、児童雑誌の人気シリーズであった「Lesnaya gazeta」(森の新聞)をラジオ放送用に編集しなおしたもので、その際に「立ち聞きした会話」が新たに追加されました。「Lesnaya gazeta」は、『Vestiz lesa』以外にも、対象年齢、出版される地域や時代などといった条件にあわせ、さまざまな編集方針で本として出版されてきました。原作の性質がこのようなものである以上、編集部は、それを新たに日本の子どもたちに向けて編集し直すことをまちがっているとは考えません。

2 「見解」3の後半(『ネバーランド』十巻の253ページ)

原作が「さまざまな編集方針で本として出版されてきました」とありますが、もしビアンキがそうしたのなら、当然のことです。また「立ち聞きした会話」も「さまざまな編集方針で本として出版されてきた」という事実を示さなければ、「原作の性質がこのようなもの」とはいえません。

ます。エマソンはこういいます。

「(自然による鍛錬には)終わりがありません。そして、コモンセンスがつくられません。」

ナチュラリストとは自分らしく自然とむきあい、楽しく自然と語りながら、自分の学問、自分の自然観の確立をめざす経験の人です。専門分化の著しい現代の科学者とは、だいぶおもむきが違います。エマソンは詩人こそがナチュラリストであり、科学者はナチュラリストにはなりえない、と断言しているほどです。

さて、以上のエマソンの言葉から、ナチュラリストとは、自然の言葉を讀んで、その人間にとつての意味を人の社会に伝えることのできる人、とわかります。

わたしは以上をもつて長い連載を閉じさせていただきますが、最後にひとこと、連載の副題である「二つの版の謎をとく」の結論を手短かに書いておきます。

わたしは、この連載の最後にとりあげたビアンキの晩年の作品である『斧をもたない匠』が、最初の作品『誰のくちばしがもつ』とみごとな呼応関係にあることを明らかにしました。すなわち、オリジナル版こそ、ビアンキの一貫した作風を保持しています。簡略版は偉大なナチュラリストが書くはずのない内容であり、他者の手によって文章を改変された作品といわざるを得ません。

これまで編集部では、電話等で原書についての問い合わせがあった場合には、きちんと内容をお伝えしており、今泉氏がほのめかしておられる、「原書がわからないようにしている」というような事実はありません。

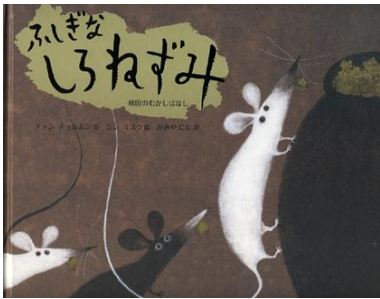
また、今泉氏は、『おしゃべりなもり』に関する弊社ホームページの記述（「動物の言葉の通訳たちが15のお話にまとめてお届けします」）が不正確であると指摘されていますが、確かにその通りであり、読者にお詫びいたします。なお、ホームページのこの部分は既に訂正してあります。

もう1点、『くちばし どれが一番りっぱ？』に関して、弊社ホームページ上の「あつと驚く結末」という記述については、今泉氏のいう「底本を変えたからこれまでの訳にはない『驚きの結末』が新訳にはある」というような意味ではつかっていません。今泉氏の文章だけ読むと、読者が誤読をしてしまうようになっていますが、これは今泉氏が二つの異なった文章をつなげた結果であって、普通に読めば「あつと驚く結末」が、オオタカが主人公のヒタキをつかまえる、という結末部分を意味するのは明白です。弊社ホームページ上でご確認ください。

3「見解」1の後半（『ネバーランド』十巻の252ページ）前半には、私の要請にこたえて原書のタイトルを訳本につけることにした、と述べています。後半では私の批判に反論していますが、その反論が成り立たないことはすでにくり返し書いてきましたので、ここではふれません。

ねー、この本読んだ？

『ふしぎなしるいねずみ』（チャン・チョルムン・文 ユン・ミスク・恵 かみや にじ・訳 1575円 岩波書店）
韓国のむかしばなし 韓国では「ねずみ年生まれの人は一食食べるにはこまらない」（本書巻末解説から）などのことわざがあ



るそうだが、そんなことわざを背景にした、

この話は白いねずみが幸運をもたらす話。
おじいさんが寝ている間に、鼻の穴を出入りしていたねずみが外に出かけ、その後をつけたおばあさんが金

の壺を見つけるのである。寝ている鼻の穴を出入りするねずみの登場など、どこかユーモラスなお話し。

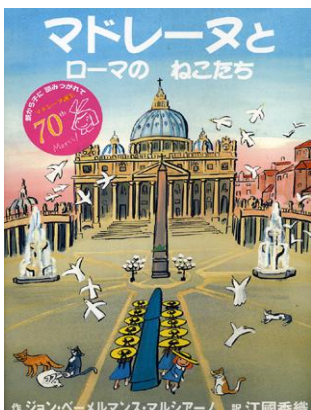
『おなかのすいたばったのトト』（得田之久・作 840円 福音館書店）



お腹の空いたばったのトトは、カマキリに追われて餌を求めて飛翔した。「チルリチルリ」音がする所に舞い降りた。そこにはチョウがミツを吸っていた。でもトトの餌ではなかった。さらさら旅は続く……

季節は秋ですが、最近「チンチロリン」や「ガチャガチャ」などの虫の声を聞くことが少なくなってきた。皆さんはいかがですか？

『マドレーヌとローマのねこたち』（ジョン・ベームエルマンス・マルシアーノ・作 江國香織・訳 1575円 B・L出版）
まだ寒いパリを後に、マドレーヌご一行は



ローマへ観光旅行に出かけた。そこでまたまたマドレーヌが事件を引き起す。ローマの有名な観光スポットを

背景にマドレーヌの活躍をお楽しみください。

この絵本「マドレーヌ」シリーズの新刊と思いきや、作者はルドウィッヒ・ベームルマンズの孫のマルシアーノ。原作者の肉親がそのシリーズを続ける形で描いた絵本には「ぞうのババル」のシリーズがあるが、これもこれから続くのだろうか？絵と文のリズムも原作者に似ている。

『旅の絵本7』（安野光雅・作 1470円 福音館書店）



「旅の絵本」の中国編です。旅の男は、今回は黄河をイメージした川を逆のぼります。中国名所や史跡さらに中国の人々の暮らしが細かく描かれています。

『小さな生きものたちの不思議な暮らし』（甲斐信枝 1470円 福音館書店）



この本は甲斐さんが自分の描いた絵本の植物や小さな生き物についてのエピソードや感じたことを綴ったも

の。かがくのとも折り込み付録などに書いた文の再収録などもあります。

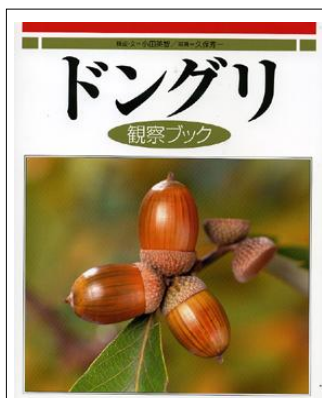
甲斐さんは自分の絵本について、また子どもについて「・・・私は科学絵本を知識としてではなく、感動としてお子さんに伝えたいのです。・・・。体中が感性そのもののような幼児期に、ちょっとでもいい、お子さん自身の目と心で自然を覗いてほしいです。」

甲斐信枝さんの「かがくのともし」6冊が復刊されました。

『あしながばち』『ひがんばな』『こがねぐも』『きゃべつばたけのいちにち』『みのむしーちゃみのがのくらし』『ぼくはたね』 各(945円)

『ドングリ 観察ブック』（小田英智・文・構成 久保秀一・写真 1260円 偕成社）

秋は実りの秋！山や公園などの木には、実が沢山実っている。子どもたちの大好きなドングリもいっぱい落ちています。山のドングリは同じように見えても、よく見ると形や色が違うものがある。木の種類がちがのだ。このドングリは、冬に向かうこれ



からの季節、山の動物たちにはとても大事である。山にドングリを探しに行こう！

骨董市

「君はまだ脇が甘い」

その3

さて、「J屋さんからいろいろ教えていただいた後、きょうの出品の下調べを始めた。「紙類」は一個所にまとめられているわけではなく、それぞれの出品者ごとの山にわかれているので、その中から「本」などを見つけて、手にとって、内容の確認をするのだ。

その日、ぼくの目に留まったのは「鈴木梅太郎」のことが書かれている一冊の本だった。お盆の上に十数冊の本が置かれていた。その中にこの1冊があった。これを手にとってパラパラとめくってチェックして、2千5百円までで買えるなら、この本を落札しようと思ったのである。

競りがすすんで、目指す「本の山」の番がきた。「この本の山、5百円です」とはじまった。ぼくはちよつと様子を見ることにした。だれかが「8百円！」と声を発した。続いて「千円！」という声、ぼくはあわてて「千5百」と言ったら、「J屋さん」「2千円！」と値を上げた。さらにぼくは「2千5百円！」と発声したら、別の人が「3千円！」と言う。

2千5百までと決めていたのは、「鈴木梅太郎」の本1冊ではそんなものだろうと考えたからである。一緒に付いている後の

十数冊は、この場合古本屋的には無価値な存在だからである。結局この「本の山」は3千円で知らない骨董屋さんが落札した。

競りの終わった後、「さっきの本、なんでも買おうとしたの?」と、「J屋さんが聞いてきた。ぼくの本を見る眼をたしかめようとしているのかと思いつつ、「鈴木梅太郎の1冊がおもしろそうだったから」と答えたら「ぼくもあの1冊があつたから応札したのだが、あの本の後半部分には、たぐさんの線引き頁が合ったことを知っているか」というではないか。

言われるまで、ぼくはそのことは全然把握していなかったのである。「いや、知りませんでした」と答えたら、すかさず「J屋さんに、「だから君は、まだ脇が甘い!」と言われてしまった、

J屋さんは、ぼくの本を見る眼を確かめようとしわけではなかったのである。というのも、あの1冊が主眼ということは、古本屋なら当たり前のことなのであって、J屋さんが聞いてきた理由は、今日ぼくに教えたのが、ちゃんとできているかどうかを確かめようとしたのだつたと気付いたのである。

ぼくは見事(?)「J屋さんの試験に落第したのだつた。それが「君はまだ脇が甘い」という言葉だったのだと、後で思った次第である。

この日はこの本だけを購入しようとしたのではなく、他にも密かに目を付けた物があるのだ。それは戦前の芝居のパンフレットなど数葉のパンフレットだった。

中でも、ぼくが目を付けたのは、昭和十二年のテアトル発行「どん底」のパンフレットである。

表紙にはゴリーキイ追悼新協劇団1月講演とある。表紙をめくると目次にまたびつくり、「どん底」の演出・・・村山知義

「どん底」を書いた頃のゴリーキイ・・・杉本良吉 「どん底」座談会・・・出演者さらには、ゴリーキイの死に際して・・・

アンドレ・ジイドなどであるではないか。さらに頁を繰ると、出演者座談会に書かれている名前にも眼を惹かれた。瀧沢修・赤木蘭子・小沢栄・北村谷栄・橋本和代・・・と、そうそうたる名前が載っている。

ぼくはこの1冊だけで、これは是非入手したいと思ったのだ。さてどうしよう。様子を見てみると、幸いこれに注目している人はほとんどいないようである。

さて、競りが始まった。「このパンフレット、さて、わからんな? 500円からいつてみようか」「500円! 誰もいないの! 誰も応札しない。「じゃー、300円でだれかいな!」そこですかさずぼくは「ハイ、ピッポです!」声を出した。「このパンフレット300円でピッポさん」と、簡単に入手できてしまった。しかも、「500円」の時は

声を発しないで、ちよつと我慢をして、300円という安値である。他にちよつとでも芝居に興味のある人がいたら、こうはうまくいかなかっただろうと、一人悦に入つた次第である。

(次号へ続く)

編集後記

今泉吉晴氏の「ピアノキの名作『くちばし』二つの版の謎をとく」が今月の十五回をもって終了した。

今泉さんのこの論文は、科学読み物に対する問題点や、翻訳に対する問題点など、ともすると見落としがちな事柄を私たちに教えてくれた。毎回最初に読ませていただいた読者として、大いに感謝します。この最終回を読むまでもなく、今泉氏の背景には一貫して著者ピアノキのナチュラリストとしてすぐれた考えや行動の評価があつた。それ故、その作品を理解しない翻訳者に対する批判であつたことは明らかだ。

一方、俎上に登つた3冊の科学絵本は、この連載がはじまつてから現在まで、科学的な記述の誤りや、誤訳を今泉氏に指摘されたにもかかわらず、今日まで改めることなく、読者に売られ続けているという現実をどう考えればよいのだろうか? 版元としての社会的責任は、どこへいつてしまったのか? しかし、連載の終了したいまだからこそ、ぼくは読者として期待をしたい。福音館書店がなぜ、作品の訂正をしないのかを読者に説明することを!